

息子に会えてよかった

今年で 37 歳になります。一人っ子で育った私は、特別子供が好きというわけでもなく、どちらかという子供は苦手な方でした。職場結婚で知り合った妻とは今年で結婚 10 年を迎え、一緒に買い物や旅行に出かけたり、私自身は穏やかな暮らしを楽しんでいるつもりでした。

妻は結婚当初から、『子どもが欲しい』『一人っ子で育ったあなたの仲間を増やしてあげたい』と言ってくれておりましたが、20 代の頃は、私自身、仕事に自信も持てず、経済的にも楽ではなかったので、積極的に子供が欲しいとは思いませんでした。“いざとなったら、いつでも子供はできる…” そう思っていました、なかなか子供に恵まれません。

痛い思いや恥ずかしい思いをするのは妻だし、体外受精などという言葉にも抵抗があり、不妊治療には反対でしたが、妻の思いに付き合いたいと、30 歳から 7 年間不妊治療に付き合いしました。妻も仕事をしながらの通院でほとんどの休みをクリニックに通いました。毎日の副薬、痛い注射、自宅では本当に効くかどうかわからない赤外線による機械でのお腹をあたためる日々、高額な数回の体外受精…。先の見えない治療がはじまりました。

治療 4 年目でやっと妊娠しましたが、その子は生まれてはきませんでした。

流産は 3 回ありました。まわりの同年代の友人や後輩はどんどん親になっていく。会社でもプライベートでも、子供の話題になると話が合わず、自分たちだけ置いていかれるような気がして、耳をふさぎたくなるような辛い日々を過ごしました。会社の同僚やまわりでおめでたい出来事があっても、作り笑いをするのがやっとでした。

子供の話題に入れない自分が辛く、大嫌いでした。私の親も妻の両親も『早く孫の顔を見たい』とか言う親ではなく、帰省をしても近所のおめでた等の話題はいっさいせずそれなりに気遣ってしてくれるのはわかりました。ありがたい反面、帰省した時も両親と特に話題があるわけではなく、親にたいして申し訳ない気持ちが常にありました。

妻も仕事をしながらの治療の日々、妻はよく泣いていました。私まで泣くと家が暗くなる。だから話を聞いて自分なりに励ましているつもりでしたが、それでも泣きやまない妻にうんざりして、『俺は君がいれば幸せなんだって言ってるだろうが、家の中が暗くなるしもう泣くのはやめろよ…』みたいにひどいことを言いました。

『無理せずに不妊治療をやめても良いのでは？』と妻に言いましたが『妻は治療をしていないと不安』と言い、クリニックに通い続けました。この世で自分の子供を抱くのは無理かなあ…と寂しい気持ちが過りました。

35 歳を過ぎた時、養子を迎えたいと妻に言われ『俺は今ままで幸せだ』『他人の子供をなんで育てないといけないんだ？』『そこまでやる必要はあるのか？』と私自身は猛反対でした。その年に県が主催する里親研修を受けましたが、妻を大切に思うからこそ、妻の想いに付き合いたいというだけで、私自身としては仕方なく研修を受けました。

子供が欲しくないというわけではありません。だからといって子育てに自信があるわけでもありません。孫の顔を見せるのが何よりの親孝行…、田舎で育った私は十分にわかっていました。まわりの人が羨ましい…子供がいないとはいえ、子供のことが切実な悩み。なんのために治療や研修をうけるのか自分自身正直わからなくなりました。でも本音は、子供がいるごく普通の家庭を築きたいだけ、それが夢だったのだと思います。

里親研修では里親の方の講演に興味がありましたが、実子がいる方が社会貢献などもかねて、養育里親として子供を育てているという話ばかりで、私自身が聞いてみたい内容とはだいぶ違いました。グループディスカッションでは、同じような境遇の子供のいない夫婦と本音で話ができ、同じ悩みを持つてる人もいるのだと少しだけほっとしたような気がしました。

子供がいてパパ、ママがいるだけの普通の家庭を築くのが夢と思いつつも、特別養子縁組里親としての研修をうけて登録されましたが、私自身は妻に引っ張られて行っただけというのが正直な気持ちで、『私なんか里親登録でいいのか？』との罪悪感みたいなものがありました。

里親登録されてからも不妊治療を続ける妻、まわりのおめでたのニュースで、辛い気持ちを味わいました。どこに出かけても、子供連れをみるのが本当に辛かった。悪気はないのですが、『まだ子供いないの？』『子供がいると楽しいよ』などと他人から、心に刺さるようなこともよく言われました。

『もし新生児がいれば育ててみたい…』と思っていましたが、児童相談所からの電話はなく、自分が父親になれるということは完全に諦めていました。『人のおめでたを喜べず、親になれるわけでもなく自分自身が大人になりきれず、このまま死んでいくのかなあ…』と妻の前では言葉に出しません、いつも思っていました。

今年の7月不妊治療の末、妻の妊娠が発覚しました。妻は嬉し涙を見せていましたが、私は『今回も本当に無事に生まれてくるのだろうか？』そして何より妻の体調が心配で、素直に喜ぶことができませんでした。妻には本当に申し訳ないのですが、それが私の本音です。妻は流産して泣きました。そんな妻を見ているのは辛かったです。

9月のある日の朝に児童相談所から『生後1か月の子が施設にいるから会わないか？』と電話がありました。『流産の直後だけど妻は会いたいと希望している』と児相に伝えましたが、児相の判断は『流産の直後なので心の傷もあるだろう…』とのことでまだ早いという判断でした。我々は余計に落ち込みました。

10月のある日、児相より『その子はまだ里親が決まっていないので会わないか？』と電話があり、その子の背景が気になり児童相談所の担当者にその子の情報を聞きに行きました。父親がわからない、母親が外国籍の子である。と聞き、他の里親が断った理由がなんとなくわかりました。私は断りました。どんな子でも育てたいというのが妻の考えです。どんな子に育つか不安、ましてや外国籍…、いろいろな不安が過りました。妻はまた泣いていました。もしかしたら、親になれたかもしれない。しかし私の気持ちを正直に伝え断りました。『もうウチには子供は来ないだろう…』寂しい気持ちになりました。妻にはとても可哀そうなことをしました。

悲しそうな妻をみるのはつらい。子供が授かるわけでもなく、そんな子を養子で迎える勇気もなく、もう私自身、どうしたら良いかわからない。職場では笑顔で働いていますが、心は寂しく、疲れていました。もう子供のことは考えたくない。しかし子供がいらないというコンプレックスや妻や親への申し訳なさみないなものは付きまとう。一生こんな葛藤が続くのが…と不安になりました。出口のないトンネルに入ったような気分を毎日過ごしていました。

10月末、『一度でいいからその子に会ってくれないか』と児童相談所から再度電話が来ました。私自身は断るつもりでしたが、妻の『その子にぜひ会いたい』という気持ちに付き合うだけという気持ちで、仕方なく面会に行くことにしました。『どうせ施設や児童相談所は行き場のない子をウチに押し付けようとしているだけなのだろう…』それが私の正直な気持ちでした。面会に行く直前まで不安や憤りみたいなものがありました。

11月10日、児童相談所の方が立ち会いのもと、初めて「ひろせホーム」を訪れました。前もって性別は聞きませんでしたが、かわいい男の子でした。子供は外国籍とはいえ、その子の母方の祖母が外国の方で、母親は、高等学校まで日本で育っている方。父親は不明とのことですが、ぎこちない手つきで彼を抱いた瞬間にそんなことどうでも良くなりました。『子供は悪くない、国籍や父親がわからないなんてたいして関係がない』『自分が親になるためのラストチャンスじゃないか』と不思議にそう思えました。その子は私と同じ8月生まれ、どことなく私に似ているような気がしてとてもじゃないけど他人とは思えませんでした。

妻と出会って11年経ちます。結婚10年目を迎えましたが、子供ができずいろいろつらい思いをして来ましたが、彼を抱いた時、今までの辛い思いが込み上げてきてホーム長夫婦や児相職員がいる前で涙を流して泣いてしまいました。

その日の夜、私はあまり眠れませんでした。はじめて彼女ができた日のような、嬉しいような罪悪感のような落ち着かない不思議な気持ちで…

翌日から、会社で昼休みは、携帯電話のカメラで撮影した彼の写真をこっそり見て過ごしています。

養子を迎えることに不安を感じて、猛反対していた私です。

彼（今後は息子と書きます）に会ってから、休みの日は息子に会いたくて、ひとりでもついつい、ひろせホームに足が向いてしまいます。ひろせホームでパパママ修業がはじまりました。

もちろん妻は、息子にメロメロ。家でも息子の話ばかりです。

はじめて息子と風呂に入った日は、耳に水を入れてはいけない、風邪を引かせてはいけない、手早くやらなければ…と妻と一緒に奮闘して、息子と風呂を楽しむ余裕はありませんでしたが、息子と風呂に入り、裸の息子が本当に、愛おしく、『息子に会えなければ、こんなに嬉しい気持ちを味わえずに死ぬところだった』とその日の、帰りの車の中で私は嬉し泣きをしました。オムツ、ミルク、着替え、抱っこ…。ホーム長夫婦よりアドバイスをいただきながら、自分流の子育ての方法を模索しております。

私の両親も『養子を迎える』ということに反対はしませんでした。いろいろな不安はあったようです。

息子の背景や自分たちの気持ちを両親に相談したら、『子供は環境の子だ』『たいへんだけど、やはり人生で子育ては必要』『外国籍とはいえ日本人と顔は変わらないじゃないか』と後押ししてくれました。

12月、息子がたまたま生誕4ヶ月の日、両親が息子に面会に来てくれていました。私の父親は、息子に会った瞬間、涙ぐんでいるようでした。初対面だというのに両親が、私が生まれた時に着せたという和服（37年前のもの）をわざわざ持参してくれて、その日は息子に着物を着せて息子を囲んで両親、我々夫婦の計5人で家族写真を撮りました。口には出しませんが、その着物を見て両親から私への愛情を感じました。

『子供は無理をしなくても…』と我々に気遣ってくれていた両親でしたが、この日を両親は待っていたのかもしれない。着物を息子に着せた時、血のつながりや国籍なんかを超えて、息子が私たちの家族になったのだと感じました。

私は思います。「私が子供の親になる」のではなく「子供が私を親にしてくれるのだ」と。息子と出会い40日過ぎましたが日に日に成長する息子に嬉しさと少しだけ寂しさを感じます。来年はもっと大きくなっていることでしょう。今日という日は二度とないのだから、息子との時間を大切にしたいと考えています。

妻は毎日、仕事帰りに赤ちゃん用品の店に通い息子の服やグッズを買ってきます。息子を自宅に迎える準備を整えている最中です。私も休日は「ひろせホーム」に通い息子を抱いてオムツを換えたり、散歩をするのが一番楽しい時間です。息子は私に抱かれてよく寝てくれますが、最近、ようやく笑ってくれるようになりました。

私の両親は言っていました。『この子がウチに来てくれてよかった』『こんなに、かわいい子が施設に行かなくてよかった』と…。私もそう思わずにはいられません。

ひろせホームは家庭的な雰囲気の中で子供を養育するところでもあり、親になるための学校でもあります。教科書や先生は息子なのかもしれません。『子供を笑顔にするのが答えだよ』とホーム長夫婦は教えてくれます。

妻は職場から1月末から育休をいただけることになりました。自宅に息子を迎えるのが今から楽しみでもあり、私と妻だけでやっていけるか不安もあります。しっかりしないといけないと思う反面、困った時は、『いつでも、ひろせホームに相談に行けばいいや』という安心感もあります。

私はまだまだ、駆け出しの父親です。“この子の将来が心配”なのは血がつながっていてもいなくても、同じだと思います。息子と一緒に成長していきたいです。子育てはやってみなければわかりません。

いつか息子も、私たち夫婦が血のつながりのある親でないとわかる日が来るでしょう。「でも、だから何」と

息子に思ってもらえるように、揺るぎない関係を築いていきたいと思います。

だから、息子との1日1日を大事にしたいのです。息子とは事実、血の繋がりはない、でも『君はパパとママの大事な息子だ』『君のパパは私なのだぞ』『息子よ、大好きだよ』そうやっていつも抱っこしています。

今年ももうすぐ終わります。年末年始は、初めての外泊で息子がウチに来るかもしれません。今はそれを楽しみに仕事をしています。

今日、息子に面会に行ってきました。帰宅してこの文章を一気に書き上げましたが、今からもう息子に会いたくなっています。4日後に息子に面会できるのが今から楽しみです。それまで、息子の写真や動画を見て仕事を頑張ります。

我々夫婦は不妊治療でも子供はできませんでした。辛い思いや寂しい思いを味わってきました。でもこれからは、その思いを愛情として息子にかけていきたいと思います。息子がどんな大人になるかはわかりませんが…

息子よ、春はママとパパと三人でマザー牧場で桜を見に行こうね。それがママの夢だったんだ。

息子よ、パパの剣道の試合をママと応援に来るんだよ。それがパパの夢だったんだ…。

息子よ、来年の年末は、おじいちゃんの実家でお餅つきをやろうか…

息子よ、パパもママもおじいちゃんもおばあちゃんも君のことが大好きなんだよ。君が大きくなったら、憶えてないかもしれないけど、ひろせホームのおじちゃんもおばちゃんも、君のことを本当に大事にしてくれたんだよ。君津のひろせホームはパパとママが君に出会えた大切な大切な場所なんだから…

息子に会ってから、今度は私がママ以上に泣くようになりました。嬉し泣きです。

息子よありがとう。広瀬さん、いつも本当にありがとうございます。

電話で面会する気のない私を『一度でいいからその子に会ってください』と強く押してくれた児相のOさん
私の両親、そしてママ、本当に感謝しています。でもこれからはじまりだものね…